



Title	Volunteerの悩み：東北での活動をかえりみて
Author(s)	相磯, 富士雄
Citation	大阪公衆衛生. 1964, 14, p. 12-12
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/84600
rights	
Note	

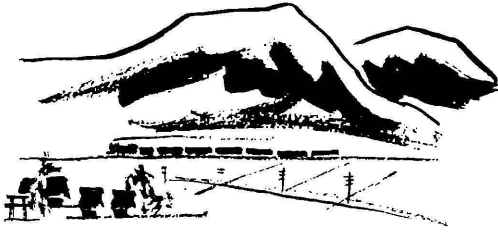
The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

Volunteer の 悩 み

—東北での活動をかえりみて—



科学技術庁 相 磯 富士雄

表面上保健衛生の問題としてあらわれてきている現象もその根は深く、問題の解決は勿論、問題点の認識ですら、公衆衛生や医療の従事者のみならず関連科学領域の人々や地域住民達と一緒に総合的に考えてはじめて明らかにされるであろう。特に我々は大きな組織の一つの歯車として働いているために、ややもすると部分を見て全体を見ないおそれが多分にある。

このような背景のもとに、保健所或いは病院の若い勤務者達によって、東北地方農民の保健の問題を中心議題とする会がつくられた。この会に参加した人々の中心をなす要求は、自分達が行っている日々の仕事に対する姿勢は正しいだろうか。この会の討論の中で自分の姿勢をはっきり確認し同時にいわゆる“煙突掃除”をおこない姿勢を正して再び仕事に戻りたい、ということであった。このような会の中で、保健婦、農民、医師、生活改良普及員、栄養士等々から研究や調査成績が発表され、健康と環境、環境と社会との関連が討議された。然しこのような研究会は1年に2回程度行えるのがやっとであり、毎回若い新らたに職場に入ってくる人達の疑問要求に答える会になり、古い人達に取ってややマンネリになってきた。同時に各地域毎の積みかさねによる研究発表こそ意義があるのであり、1年1回か2回の議論はそれ程意味のあるものではないということになった。

然し地域的に組織をつくってはみたが、実際に農民代表までもふくめての地域組織をつくれたと

ころは少なかった。その結果ポリオ対策の問題がおきた時も会員個々では活動した人もいたが会としては殆どどうごくことが出来なかった。

そのために今3つの形への変化の可能性が出てきている。第1には組合活動をしっかりやり、自治研の強化によって現在の農村の保健問題をもっと戦闘的に取りくんでいこうとする人達。ただ、まだ組合のない町村、或いは自治連に入っていない組合も多く、猶現在の形の会を要求する人達がいる。避地で働いている人達ほど、この要求は強い。

第2にはもっと理論的なものを求め小人数で回数をふやし基礎的な理論を身につけていきたいという人達。

第3には、会での討議が深まってくると行政の現状批判が強くなってきて、そのために上司からこの会について不安視されるから、少なくとも保健所長クラス以上の人達もふくめ、これらすべての人達に共通した保健衛生上の問題を討議し、統一した見解をもちこれが解決にあたっていくべきだという人達もいる。

なお、会の運営上でもう一つの大きな問題は事務局の弱体化である。実際の事務局を担当していた一保健所の中心メンバーがそれぞれ転勤して離ればなれになると同時に運営が非常に困難になってきた。大阪のように交通機関が発達しているところではさほどの支障を感じないかも知れないが東北地方では致命的な場合もある。この点、大学のような研究機関に勤務している者が事務局をつくれる体制であればよいとつくづく思う。